

ワークショップ 1

症例から学ぶ 治療変遷から読み解く腎癌治療

何を, どこまで, どのように?

司 会	三 股 浩 光 (大 分 大)
	雑 賀 隆 史 (愛 媛 大)
演 者	富 田 善 彦 (新 潟 大)
	田 中 正 利 (福 岡 大)
	荒 木 元 朗 (岡 山 大)
	亭 島 淳 (広 島 大)
	井 上 享 (大 分 大)

司会のことば

腎細胞癌治療はこの数年の間に, ロボット手術の導入を始めとする新手術手技の普及, TKI, mTOR 阻害剤などの分子標的薬, そして IO 剤の登場とこれらの併用療法の開発など目まぐるしく変遷してきている。このような新しい治療法の進歩や導入を踏まえて, 腎細胞癌治療は分子標的薬の登場以前の dark age (~2005) から, 分子標的薬登場後から Nivolumab 登場前までの modern age (2005 ~ 2015), IO 剤が普及してきた現在の golden age (2015 ~ 2025) と移り変わって, さらに新薬の登場や併用療法, precision therapy の発展から生存率が飛躍的に向上して治療症例が大半を占めてくる diamond age がやってくるという説も現れるようになってきた (Nat Rev Dis Primers. 2017)。さらには転移性腎細胞癌に対する cytoreductive nephrectomy について, その適応を再考させられる臨床試験結果 (N Engl J Med. 2018, JAMA Oncol. 2019) が公表されるなど, 従来から行われてきた治療戦略に大きな影響を与えられてきている。

本ワークショップではこのような治療法や戦略が大きな変遷を遂げていく最中における —— 何を, どこまで, どのように? —— という観点で現時点での最適の医療を明確にし, 近未来の治療を見据えるための一助となるべく開催された。

この命題に対して, まず新潟大学富田先生から腎細胞癌治療の変遷について歴史的な背景から現時点, そして

予測される新しい展開に至るまで手術療法から薬物療法の大きな流れを解説いただいた。とくに新規薬剤とその併用療法に関する豊富な経験からここ数年間の近未来における転移性腎細胞癌治療の展望を示された。

次に福岡大学田中先生から下大静脈腫瘍塞栓を伴う腎細胞癌の手術療法について低侵襲手術としての腹腔鏡下手術の位置づけと Robot 手術の応用における将来展望を解説いただいた。さらに TKI を用いた presurgical therapy と, さらに IO 剤や TKI と IO 剤の併用による新しい presurgical therapy の可能性などを含めて下大静脈腫瘍塞栓症例の治療法について予測される戦略の変遷を解説いただいた。

これら 2 つの総論的解説をもとに “症例から学ぶ” ために, まず岡山大学荒木先生から下大静脈腫瘍塞栓症例で肝部分切除を行って視野展開を容易にするという新しいアプローチを用いた症例をもとに手術の具体的手技開発の可能性とヒントを提示していただいた。

次に広島大学亭島先生からは IO 剤の時代における TKI の位置づけや投与時期, さらには局所療法の併用について症例提示をもとに考案いただいた。

最後に大分大学井上先生からイピリムマブ・ニボルマブ併用療法の経験症例から, 今後に注意すべき免疫関連有害事象とその対応方法や治療戦略についての考案をいただいた。

今回のワークショップにおいては, 腎細胞癌の最新の治療法, 治療方針について会場参加者とともに議論し, 知識の整理と近未来の治療戦略についての知見を得たといえる。